

<報告>

語学教育カリキュラム研究開発分野プロジェクトについて

[1995（平成7）年度～1997（平成9）年度]

井上逸兵

1. プロジェクトメンバー
2. テキストの構成（3部門）
3. 本プロジェクトの基本構想
4. 各テキストの概要

教育システム研究開発センター語学教育カリキュラム研究開発分野専任教官井上逸兵、および以下のプロジェクトチームのメンバーは、1995（平成7）年度～1997（平成9）年度の本分野のプロジェクトとして大学生（特に信州大学レベルの大学生）に適した英語の教材、副教材について調査研究を行い、試作教材を製作した。以下はその概要である。

1. プロジェクトメンバー

井上 逸兵	（代表者・教育システム研究開発センター助教授）
橋本 功	（人文学部教授）
加藤 鋤三	（人文学部助教授）
ルジチカ, デイビッド	（教育システム研究開発センター外国人教師）
マーク, ロバート	（人文学部外国人教師）

2. テキストの構成（3部門）

- ① 英語によるコミュニケーションのための時事問題討論型教材：
『英語の鉄人養成ギブス』
（担当：加藤，マーク）
- ② 英語によるコミュニケーションのための生活密着型教材：
『Communicative Adventures in Britain』
（担当：橋本，ルジチカ）
- ③ コミュニケーションの前提となる異文化理解および異文化間のコミュニケーションに対する理解のための教材（読本）：
『会話のしくみと異文化理解』
（担当：井上）

3. 本プロジェクトの基本構想

本プロジェクトにおける教材作成にあたって、チーム内で討議を重ねた結果、次のような

ことを基本構想とした。

- (1) 挨拶や社交的会話以上の「内容」の伴ったコミュニケーションの発受信の能力の育成をめざす。
- (2) 社会や文化的な知識を伴ったコミュニケーション能力の育成をめざす。
- (3) 異文化間コミュニケーションへの理解を前提としたコミュニケーション能力の育成をめざす。
- (4) 大学生の英語学習のモチベーションとなるべく、各種英語能力試験の対策をかねたものにする。

「国際化」といわれてすでに久しい今日の社会において、外国語、特に英語の運用能力は、多くの状況において必要不可欠のものとなっている。どの言語の、どの程度の運用能力が必要か、またその言語の特にどのような面のスキルが必要かは状況や学習者の職業や生活の形態などによって異なるであろう。あるものは海外旅行に必要な程度の能力でよいかもしれないし、またあるものは英語で重要な商取引をしなければならないかもしれないし、外国語で書かれた学術専門書を読むことが必要とされるものもあるであろう。ある意味では必要とされている範囲のそしてその程度の能力さえあれば何も問題は起こらない。かつてある日本の旅客機がハイジャックされ、その事件の解決後日本人スチュワーデスたちが英語でインタビューを受けるということがあった。しかし、彼女たちはほとんど英語の質問に受け答えができなかった。質問の内容すら理解できていないようであった。彼女たちは日常的に機内では業務として英語を用いているはずであり、またそれなりの訓練も受けているはずであった。しかし、彼女たちが英語を使うのは機内および空港内という非常に限られた状況であり、使う語彙や表現も同様に限られたものだったのであろう。起こりうる事態や乗客から発せられる英語もある程度予想がつくため、それに対応できる能力だけがあればよかったのである。これは一概に非難すべきことではない。彼女たちはそれまでその程度の、そしてその範囲の英語能力で事足りていたのであれば、なんら問題はないのである（ハイジャック後のインタビューの訓練まで要求するのは酷な話であろう）。結局のところ我々はみなある「限られた」世界で生きている。我々は神出鬼没にいたるところで何もかもをするわけではない。昨日スチュワーデスをしていたものが、今日いきなり米国議会で質問を受けるといったことはないのである。したがって我々が外国語を学習する際も、自分が一体どういう局面で（当面においても将来的にも）英語を使うかを考える必要があり、また基本的にはその範囲の外国語能力を身につければよいのである。

さて大学生が外国語を学習する際の想定されるべき場面や状況、必要とされる能力の程度はどのようなものだろうか。同じ大学生でも置かれた状況や将来置かれると予想される状況は様々ではないことはいままでもない。たとえ同一大学の同一学部の学生であったとしてもそうであろう。英語のような既習外国語の入学時の能力も個人差がある。もちろん一人一人の学生のニーズに応えたプログラムが組まれることが理想であるが、現時点ではそれは望むべくもないので、本プロジェクトではある程度共通すると考えられる状況や運用能力の程度を想定することとした。考慮した点、前提とした点は次のようなことである。

- ・基本的な文法学習はすでに終えているか、もしくは独習すべきものである。
- ・基本的なリスニングの能力も独習によってかなりの程度に向上させることが可能であり、

またそうすべきである。

- ・パターンプラクティス的なスピーキングの学習も独習によってなされるべきである。
- ・大学生に相応しい知的な議論ができるような能力を育成すべきである。
- ・留学や長期海外出張を想定した、文化的知識をともなったモデル的シュミレーション学習が必要である。
- ・非英語圏の対話者をも想定した、異文化間コミュニケーションに対する理解にもとづいた外国語学習が必要である。
- ・外国語学習にとって重要なモチベーションもしくはインセンティブを学習者がもつことが必要である。

先の4つの基本構想はこれらの考慮、もしくは前提から導き出されたものである。共通教育の英語を担当する一教官として見る限り、現在の信州大学の学生の英語の運用能力は上の最初の3つで挙げている、基本的な文法やリスニングやスピーキングのトレーニングをなしで済ませられるという段階には必ずしもない。しかし、本プロジェクトでは上に述べているように、そのようなトレーニングは基本的に独習が可能であり、またその方が効率的であると考え、それに関する教材の研究開発は行わなかった。もちろん実際にはそのような教材を適切なオリエンテーションのもとに与え、かつ設備的にも十分に学生に提供することが重要であることはいうまでもない。

また外国語学習にとって学習者の動機付けが重要であることも十分に認識されるべきであろう。ある外国の作家の作品を原書で読みたい、外国人と友達になりたい、外国語を習得しなければ仕事ができない、などの欲求もしくは必要性が外国語学習の原動力になるはずである。大学生にどのようなインセンティブを与えるのが適当であるかは、これまた個人差があり判断が難しいところであるが、本プロジェクトの特に教材①は英検、TOEFL、TOEIC等の各種英語能力試験対策を盛り込んだものである。より上位の級、高得点を目指すということ自体がモチベーションになりうるであろうし、またそれによってよりよい就職ができると考える学生にとってはさらに強いモチベーションになりうると思ったからである。

以上のような基本構想に基づき、3種類の教材を研究開発し試作した。①は時事的な問題を題材として、大学生に相応しい高度な内容の議論が可能な英語の能力の育成を目指したものである。②はイギリス社会を例として、英語が話されている社会に暮らすことを想定し、文化的知識に基づいた英語の能力の育成を目指したものである。教材①②についてはネイティブスピーカーの吹き込みによるオーディオテープも製作する予定である。③は近年の会話分析などの相互行為的社会言語学の知見にもとづいた、コミュニケーションのしくみと異文化間コミュニケーションの諸側面に対する理解を得るための読本である。次節においてはさらにもう少し詳しくそれぞれの教材の概要を示したい。

4. 各テキストの概要

以下は各テキストの概要（担当者のレポートによる）である。なお、最後に補遺として各教材のサンプルを加えてある。

4.1 英語によるコミュニケーションのための時事問題討論型教材：

『英語の鉄人養成ギブス』（担当：加藤敏三 人文学部助教授，マーク，ロバート 人文学部 外国人教師）

（以下加藤助教授のレポートによる）

テキストの構成

- A The Japan Times の社説
- B 社説の内容を理解しているかどうかを確かめる設問
- C 社説に出てくる難単語・熟語・表現の解説と時事用語の簡単な解説
- D 社説に出てくる単語・熟語・表現の和訳試験

テキストのねらい

- ① 日本のことを英語で情報発信できる真の国際人となるのに必要な英語力，特に語彙力を持たせる
- ② 英検や TOEFL，TOEIC 等の英語能力試験対策
- ①について

国外に出て現地の大学卒レベルの人たちと話していると，当然最もよく聞かれるのは日本についての質問である。そのような時困ることとしては，日本が置かれた政治・経済状況を当の日本人が知らない場合と，例えそれらに明るく日本語では説明できるとしても，英語では語彙力不足で説明できない場合であろう。この教材で英字新聞の社説を選んだのは，この2つの不安を一挙に解決するのをねらったことである。このテキストでは，まず授業時間中にBで自分の理解度をチェックしつつAを読み，その後で初めてCが与えられる。学生はCを助けに次の授業までに一日一回はAを音読することが課せられる。次の授業では冒頭でD，つまり前回のAに出てきた語彙の試験を受ける。そして次の社説に進む。テキストの使い方は以上のようなものであるが，一番重要な部分は，一日一回の音読である。これにより学生は十分な口慣らしをし，かつ語彙力が飛躍的に増大することが期待される。そして，真の目標は，上に掲げたように，日本のことを英語で情報発信できる真の国際人となることである。

②について

Aの社説とBの内容理解の設問は，一回毎に教師が学生に配付するという形を取るため，学生は予め英文を見て予習することはできず，初めて見た英文を20分以内に読んで理解することが要求される。その際，もちろん辞書の使用は許されない。これはやや難しい英文を時間内で速く読む訓練であると同時に，辞書が使えず限られた時間内で大量の英文をこなさなければならないという，英語能力試験を受けるときの状況を日常的に経験させるというねらいがある。更に①について上で述べたように一日一回の音読で語彙力を伸ばすことができるような構成になっているが，その語彙力は目に見えるような形としては，英語能力試験での成績向上として威力を発揮することが期待できる。

4.2 英語によるコミュニケーションのための生活密着型教材：

『Communicative Adventures in Britain』（担当：橋本功 人文学部教授，ルジチカ，デイビッド 教育システム研究開発センター 外国人教師）

（以下橋本教授，ルジチカ 外国人教師のレポートによる）

About the text

- 1 .The aim of this book is partly to help a Japanese person to live in Britain.
- 2 .But in terms of giving information it is not intended that it should be a complete or exhaustive directory. (We will give a list of other reference type books to consult at the back of the book.)
- 3 .The point of the book is rather to convey something of the spirit of modern Britain, and
- 4 most especially to show how people really speak.
- 5 .So it will be written in a colloquial style.
- 6 .The notes will give explanations not only of meaning but also sometimes of tones of speech, such as irony and sarcasm.
- 7 .We will try to include areas of language and culture that might seem particularly perplexing to the Japanese visitor.
- 8 .There will be notes for example on the kind of confusion that can be caused by Japanese English loan-words, and by the differences in usage between American and British varieties of English.
- 9 .From the students' point of view we will try to make the book seem attractive by:
 - a) writing the text as a chronological narrative which follows the progress of an individual character with whom the reader can, hopefully, identify. (Although note the artifice entailed in the fact that this character always speaks perfect English.)
 - b) varying the structure of individual units so that the student does not feel bored
- 10 .Much of the book will consist of transcriptions of conversations. One obvious way for the teacher to use the book will be to ask students to read the speaking parts out loud. Many of the questions in the exercise booklet will also lend themselves to pair work.
- 11 .The general approach will be to try to show the real Britain, as far of course as such an idea has any meaning, and to steer away from the more stereotypical image of a culture steeped in ancient traditions, which is the kind of perception which many Japanese still have of Britain.

The book will be completed this year, which means it will coincide with Festival UK98 in Japan. In a written statement in which he commends the festival to Japanese people, the Prime Minister Tony Blair says, ' [...] I fear many people in Japan still think of Britain only in traditional terms. I want to show them that Britain is much more than that. We in Britain will value the best of our old traditions. But we also welcome fresh ideas and fresh challenges'. He goes on to talk of Britain's 'readiness to embrace change' and of 'the multi-cultural diversity that enriches British life'. We hope that the book will

also reflect something of this modern image of Britain, and that this is precisely why it will be useful for the Japanese reader.

4.3 コミュニケーションの前提となる異文化理解および異文化間のコミュニケーションに対する理解のための教材（読本）：

『会話のしくみと異文化理解』（担当：井上逸兵教育システム研究開発センター助教授）
本テキストの目次は以下の通りである。

はじめに

第一章 伝え合いのしくみ

ーことばによるコミュニケーションとことば以外のコミュニケーションー

第二章 丁寧さのしくみ

ーことばによってどのように振る舞うかー

第三章 関わり方のしくみ

第一節 文と文とをつなげるもの

第二節 人と人をつなげるもの

第四章 異文化との伝え合いのしくみ

ー異文化間コミュニケーションのいくつかの問題ー

おわりに

第一章ではコミュニケーション行動全般に対する理解を促し、その中での言語によるコミュニケーションの位置づけを行う。第二章では情報を伝達する以外に対人関係を円滑にするために用いる様々な言語的な方策について考える。第三章は第一節において二文以上の文の連なりにおいて、いわゆる談話標識（discourse marker）の働きをみる。第二節では繰り返しや沈黙がコミュニケーションにおける対人関係や談話構造をどう構築しているかをみる。第四章では異なった文化的民族的バックグラウンドをもち、異なった会話のスタイルをもったもの同士のいわゆる異文化間コミュニケーションの事例からコミュニケーションの諸問題を考える。

本書の基本的な考え方は、我々が外国語でコミュニケーションを行う際に文法や語彙が正しくとも様々な理由でミスコミュニケーションが起こる、その要因を考察し外国語学習の一助としようとするものである。詳細は後の補遺を参照されたい。

補遺

以下3部門の教材のサンプルである。

教材 ① サンプル

Closer to a national consensus

Judging by comments that keep finding their way into print, some observers still think of Japan as a nation in which all citizens share uniform views on almost every subject. To be fair, Japanese people themselves often contribute to this kind of thinking. The actual situation is entirely different, of course, and no greater proof of this is needed than the continuing lack of a public consensus, despite years of debate, on whether brain death does indeed equal human death. General agreement on this would make organ transplant operations from brain-dead donors far less controversial than they still are in Japan.

Instead, the nation is demonstrating once again that it will take more to achieve a consensus on this question than merely passing a bill, as Lower House lawmakers did late last month by a vote of 320 to 148, that not only recognizes brain death as actual death but authorizes doctors to conduct organ transplants from brain-dead donors. That is the only way to explain the varied and sometimes highly emotional reactions that greeted the Diet vote. They range from enthusiastic support by some medical and patients' groups representing individuals desperately hoping for an organ transplant to an official appeal by 34 religious leaders for more time to consider the issue.

Nevertheless, the vote on the brain-death bill marked the first time in Japan's postwar history that almost all major political parties allowed individual legislators to decide for themselves whether or not to support the bill.

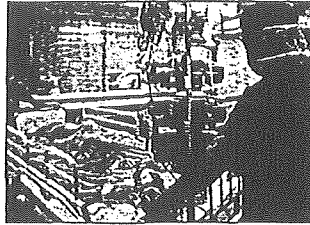
Every time in the past when a bill similar to the one that passed last month was submitted to the Diet, the members of the Lower House voted it down.

If no consensus yet exists, it seems fair to say that Japan is finally on the way to reaching one. This comes long after the rest of the industrialized world accepted organ transplants and nearly three decades after the first and only heart transplant operation was performed here.

In 1968, Dr. Juro Wada, of Sapporo Medical University, removed the heart of a presumably brain-dead donor and transplanted it into the body of an 18-year-old youth, who lived only 83 days. The operation, for which public opinion was in no way prepared, set off shock waves of concern and anger that led to the banning of all such operations in this country until a "suitable time" in the future. At one point, a criminal complaint was fielded

against the late Dr. Wada, accusing him of murder.

Unfortunately, the long-time refusal at the highest levels of government to officially recognize brain death as actual death has allowed alarmists to continue promoting grisly worst-case scenarios about the removal of organs from "living bodies." A number of points that could help restore calm to the debate are being overlooked. For example, as long ago as 1985 the Health and Welfare Ministry set five conditions that had to be met before brain death could be declared: the patient must be in a deep coma, must require assistance to breathe, must display dilation of the pupils of the eyes, must show no brain-stem response and, last, a six-hour waiting period must be imposed during which none of the other conditions show any signs of abating.



It is by no means certain that the Upper House will pass the bill and thus make it law. A special committee is being set up to assist it in studying the issue. Its

deliberations should be made known to the public. The days when ordinary Japanese were kept in the dark on medical matters should be over.

In early May, it was learned that many of the fears felt by the public about organ transplant operations are being addressed at last — not by legislators or government bureaucrats, but by members of the medical ethics committee of Kitazato University in Kanagawa Prefecture. These doctors have taken the precedent-setting step of drafting extremely strict rules not only for the determination of brain death but, equally importantly, for obtaining the consent of family members for the use of a brain-dead person's organs. Interestingly, the draft that resulted from more than two years of discussions does not recognize brain death as human death. Some observers ask if these strict rules may not simply make such operations virtually impossible to conduct. Even the head of the committee recognizes this concern. It seems more likely, however, that the procedural guidelines soon to be released by Kitazato University will only be essential first steps.

They are certain to have a profound effect on other medical institutions. Just as consequential, by being extremely careful to ensure the protection of individual human dignity, they bring the day of consensus that much closer.

番号 _____ 名前 _____

養成ギブス 小試験 6 / 19

1. ... gave its unqualified approval to the controversial land reclamation project under way in Isahaya Bay.

...は、諫早湾で進められている異論の多い干拓事業を無条件で認めた

2. the project is both fiscally ill-advised and environmentally unsound.

その計画は財政的にも詰めていないし環境的にも健全なものではない

3. an endangered species

危機に瀕している種

4. this is the kind of pet public-works project that refuses to die.

これはとてもじゃないが無くなりそうもない、毎度お馴染みの公共事業だ

5. to increase rice-paddy acreage

稲作面積を増やす

6. to help alleviate the nation's chronic shortage of its staple food.

国の主食が慢性的に足りないのを緩和させるのに寄与する

7. the project keeps being canceled and yet keeps springing back to life.

その計画はキャンセルされつづけているが、しかし復活しつづけてもいる

8. the imminent destruction of wildlife

野性動植物の差し迫った破壊

9. director general of the Environment Agency

環境庁長官

10. Chief Cabinet Secretary

官房長官

11. ... gave fresh ammunition to opponents

[文字どおりの意味] : 相手に新しい弾薬を与える

[比喩的な意味] : 相手に新しい論拠を与える

12. to blindly proceed with more of the same

同じ事を更に盲目的にし続ける

13. local people

地域の人たち

14. such a transparent attempt to curry favor with a regional voting bloc

地域の選挙区のご機嫌取りのそんな見え透いた企て

15. the "enjoyment" in store

今後あるはずの「よいこと」

番号 _____ 名前 _____

養成ギブス 小試験 6 / 26

1. Judging by comments that keep finding their way into print
2. far less controversial
3. ... than merely passing a bill
4. enthusiastic support by some medical and patient's groups representing individuals desperately hoping for an organ transplant
5. the members of the Lower House voted it down
6. If no consensus yet exists (カタカナ使用不可)
7. the operation, for which public opinion was in no way prepared
8. a criminal complaint was fielded against the late Dr. Wada
9. A number of points that could help restore calm to the debate are being overlooked.
10. the patient must be in a deep coma
11. dilation of the pupils of the eyes
12. Its deliberations should be made known to the public.
13. The days when ordinary Japanese were kept in the dark on medical matters should be over.
14. the medical ethics committee
15. the consent of family members for the use of a brain-dead person's organs

抄訳

●国民の合意へ：脳死は人の死か

日本は国民全体が大方の問題に対して同じ意見を持つ国だという見方がいまだにあるようだが、そんなことは全くない。長年の議論を経てなお、脳死が人間の死であるかどうかに関する国民の合意が得られていないことがそのよい証明である。

先月、脳死を人の死とし、脳死状態の臓器提供者からの臓器移植手術を認める法案が衆議院において、320対148で可決されたが、それをもって国民の合意とするにはほど遠い。

臓器移植を求める医療関係者や患者の熱烈な支持、宗教団体による問題見直しの訴えなど、決議に対する反応は様々だったが、ほぼすべての主要政党が議員個人の判断で一票を投じることを許したのは今回の投票が戦後初めてである。

日本はようやく国民の合意に向かって進みつつある。他の先進国が臓器移植を認可してから、長い年月が経つが、日本初で唯一の心臓移植手術が行われてから30年近くにもなる。1968年札幌医科大学の和田教授は脳死と判定された臓器提供者から心臓を摘出し、18才の青年に移植した。青年は術後83日間だけ生きた。予期せぬ手術は懸念と怒りを生み、「適切な時期」が来るまで臓器移植手術を禁止する動きにつながった。

政府の拒否感のため、「生きている体」からの臓器摘出の最悪の筋書が振りかざされたが、一方冷静な議論の素地もあった。85年にはすでに厚生省が脳死判定の条件として、患者が昏睡状態にあり、呼吸装置を必要とし、瞳孔が開き、脳幹反射がなく、その状態が6時間続いているという基準を定めている。

法案が参議院を通過して法律となるかどうかはわからない。この問題の研究のための特別委員会が設置されているが、その審議は公けにされるべきだ。医療問題について国民がかやの外に置かれる時代は終わりにしなければならない。

北里大学の医療倫理委員会は5月初旬、脳死判定及び脳死患者の家族から臓器使用への同意を得るための厳密な規則の草案を発表した。興味深いことにこの案では脳死を人の死と定義つけていない。規則が厳しすぎるという懸念もあるが、指針としては最初の一步であり、他の医療機関に与える影響は大きい。

人間の尊厳を守ることに細心の注意を払って作られた分だけ、この草案は臓器移植問題に関する国民の合意が得られる日を近いものにしたのである。

教材 ② サンプル

Unit 6

Opening a Bank Account

A few days later Ken meets Chris again in the pub for lunch, and this time he decides to ask him about banking.

Ken: Chris, I was thinking that I should open a bank account.

Chris: Well, yes. What are you doing for money at the moment? Hiding travellers cheques under the mattress?

Ken: Sort of, yes. Though I can use my credit card for some things. But I'll need an account for when I start getting paid at the end of the month. And I was just wondering are there any differences between English and Japanese banks?

Chris: Probably not many. But there are a couple of things that I can think of. One is the chequebook. Cheque with a 'q'.

Ken: With a 'q'?

Chris: Well, yes. The way the British use the word 'cheque' might confuse you if you've learnt that Americans use the word 'check' to mean what we in a restaurant would call a bill.

Ken: OK, so what is a chequebook?

Chris: It's a small booklet of detachable sheets each of which can be used to transfer money from your bank account to the account of another person, company or shop.

Ken: So you use them to pay for things?

Chris: Exactly. Which is funny if you think of the Americans again. In England we sometimes use a cheque to pay the bill in a restaurant. But in the States, if they pay with cash, they'd be using 'bills', which is what they call bank notes, to pay the 'check'. Confusing or what?

Ken: But are cheques easy to use?

Chris: Oh, yes, very simple. You just have to write the date, the amount of money you want to be taken from your account, and the name of who you want the money to be given to. And then you have to sign it. The bank will also give you a cheque guarantee card. This looks like a credit card and you usually have to show it when you write a cheque in a shop. It has your signature on it and proves that the bank is prepared to honour your cheque. Otherwise they have no way of being sure that your cheque won't bounce.

Ken: 'Bounce'?

Chris: Yes, it's what can happen when you write a cheque for more money than you have in your account. Sometimes it can happen by accident, if you don't keep track of how much money you've got. The bank doesn't like it, of course. And they also charge you for it.

Ken: So, that's different to Japan then... [can't go overdrawn?]

Chris: Yes. Another difference is the way the cash-point machines work. You call them ATM's in Japan.

Ken: What are the differences then?

Chris: Well, for a start there are greater limits on the amount of money you can take out at one time, usually no more than £250, which is very small compared with the Japanese ATM. I think this might be because England is just not as safe as Japan, and English people try to avoid walking around with large sums of money.

Ken: That's useful to know.

Chris: And the other difference is that most cash-point machines are open twenty-four hours a day. This might seem curious in a country where most of the shops are closed by 5.30. But then it can be very handy if you are out in town for the evening to be able to take some cash out of the wall.

Later that afternoon, Ken heads for the high street near to his new flat and strides into a bank.

Ken: Hello. I'd like to open an account.

Receptionist: OK, can I just take your name please and I'll get someone to see you.

Ken gives his name to the receptionist and is asked to take a seat for a few moments. After a couple of minutes the manager appears and leads Ken to a room off to one side.

Manager: Mr Yamaguchi, pleased to meet you. (They shake hands).
You'd like to open an account with us?

Ken: Yes, I'm going to be living in London for at least a year.

Manager: You're working here are you?

Ken: Yes, I work for a Japanese company.

Manager: Right. OK, well, let me just explain roughly how it works and then I'll ask you a few questions. You probably know that there are basically two kinds of accounts, current accounts and

deposit accounts.

Ken: Actually, I'm not sure I do know.

Manager: OK, well, it's quite simple really. Most people have a current account which gives you a cheque book and a guarantee card. A deposit account is generally just for saving money, and you can't write cheques. Now as a foreign visitor to the UK, we wouldn't at first be able to issue you with a chequebook, because obviously we would need a little time to assess your financial situation. But if you're staying a year or more, we would be able to carry out some sort of credit assessment and hopefully open a current account for you.

Ken: I see.

Manager: But we can open a deposit account for you straight way, and give you somewhere to keep your money. And, of course, it will earn interest for you too. I'll just take some details.

The manager asks Ken to give him proof of his new address and information about his job, etc.

Vocabulary

... or what? = isn't it?

to honour a cheque

to keep track of

handy = convenient

roughly

to issue

credit assessment

Comments and Notes:

Writing a cheque is actually a little bit more difficult than Chris claims. You have to write the amount of money very clearly in words and figures, being careful not to leave any empty space in which someone else could add something. So you should always draw a line through the spaces in which you haven't written anything. Look at the example below.

教材 ③ サンプル

はじめに

我々がことばやコミュニケーションのことを強く意識する状況の一つは外国語を使ったり、習得しようとしている時だろう。思うように単語や動詞の活用をおぼえられなかったり、文法書を前に首をひねったりする。もう少し学習の段階がすすめば、文法的にはなんとか正しい文を組み立てられるのだけれども何となくおかしい表現になってしまったり、ネイティブスピーカーとの会話がスムーズにいかないような気がしたりする。自分の母語を話しているときにもうまく言いたいことを伝えられなくてもどかしく思ったりすることもあるが、外国語の場合はそのフラストレーションはさらに大きなものだし、実際のところそういう理由で外国語の学習をあきらめてしまう人も少なくないだろう。

どのようにすれば外国語を話せるようになるのであろうか。答えは実は簡単である。その言語が話されている国で暮らせばよい、話せるようになるまで。我々が自分の国のことば(母語)をどのようにすれば話せるようになるだろうかとわざわざ考えないのはそのようなことを考えるようになる頃にはすでに母語習得が完了しているからであるばかりでなく、人間誰でもひとつくらの言語を話す環境でふつうは育つので、そのような環境にいれば自然にその言語を習得するはずだとわかっているからである。つまり、ふつう人間はその環境にある程度の期間いればことばを必ず話すことができるようになるのであり、それが外国語、第二番目以降の言語であっても事情は若干異なるにせよ基本的には同じである。

しかしある外国語を習得したいと思っても、すべての人がそのことばが話されている環境に暮らすことができるわけではない。英語が話されている国に長くいれば、英語を習得できるであろうとはわかっている、むしろそれができない人の方が実際には多いはずである。そういう人たちは(もちろん勤勉であればの話だが)、いろいろな方法を使ってそのことばが話されている環境にいるのと同じような体験をしなければならないととりあえず考える。「幼子が母親のことばを口まねするように」単純なことばの繰り返しをしようと思う人もいるかもしれない。しかし、幼い子供と違って大人はそのような繰り返しには飽きやすいし、効率が悪いような気がしてくるかもしれない。内容的にはつまらなくならざるをえないので、大人には大人のやり方があると思うだろう。

基本的にはそれはとがめられるべきことではない。大人が文法を学ぶのは主にそういう理由からである。子供と違って、理屈をもって記憶できるから、ある規則性を憶えてしまえばある程度それに則って文を産出したり、理解したりできる。その規則をおぼえて、あとは語彙をある程度以上知っていれば、規則に合わないような文も多少あるとしても、かなりの文を理解し、また作り出すことができるはずである。現在の学校の英語教育では文法の学習が軽視されるきらいがあるようだが、それを補うだけのことをするには膨大な時間を要することを考えればあまり得策とは思えない。

しかし、文法にかなった文を産出し、理解できれば、そのことばを十分に話せていると言えるかというところも怪しい。例えば⁽¹⁾;

(1 a) Would you be so kind as to pass the salt?

(1 b) Gimme the salt.

の二つの文を比べてみると、少なくともネイティブスピーカーであれば(そしてある程度以上の英語学習者であれば)それぞれの文が使われそうな状況が異なっていることがわかるだろう。(1 a)はかなりかしこまった状況やよそよそしい話者間の間柄を連想させるし、(1 b)はくだけた状況や親し

い間柄を思い起こさせる。日本語の場合それはもっと顕著かもしれない。

(2a) 塩をとっていただけますか？

(2b) 塩とって！

日本語の場合は第二章で詳しく見るように丁寧さが高度に形式化されているので（要するに「敬語」が体系化されているので）、つねにこのような形式上の選択を迫られる。

エピソードを一つ。これはニューヨークのある日本人学校の教員から聞いた話だが、この学校は日本人の子女が学ぶ学校ではあるものの、現地で生まれ育った生徒も珍しくなく、日本語を使う状況が非常に限られていて、家庭と日本人学校でしか日本語を使わないものも珍しくない。ある日二人の男子生徒がけんかを始め、だんだん加熱していき、一方の生徒が

「てめえ、オソトに出ろ！」

と叫んだ。この時相手の生徒はまったく笑わなかった。「オソト（お外）」ということばは、日本でふつうに暮らしている日本人であれば、幼児が使うかまたは大人が幼児に使うことばであり、同じ状況であれば「外に出ろ！」とか「おもてに出ろ！」という言い方の方がふさわしいことを知っている。「オソトに出ろ！」などと言われれば吹き出してしまってけんかもそこでおしまいということにもなりかねない。この生徒はおそらくふつうのその年代の生徒が経験するような社会的状況を日本で、あるいは日本語で経験しなかったために、それがいわゆる幼児語であることを学習できなかったのである。

このような例を見ると、ことばを話すということは単に文法的に正しい文を作り出すことだけにはとどまらないことがよくわかるだろう。「オソト」ということばが文法的に不適格であるわけではない。一見「お菓子」や「ご飯」と同じくらい丁寧なことばに見える。しかし現実の状況では文法的に可能な文の中からその状況や相手に応じた適切な表現を選ばなければならないのである。

しかしながら外国語についてはこのようなことは教室ではなかなか学びにくいということも事実だろう。そのような使い分けはその社会にその社会のメンバーとして生活し、様々な状況や対人関係に応じて習得されていくものだからである。そしてさらに学習者にとって困難なことに、前に見た例のようにどういう表現形式を選択するかということだけでなく、時には場面や相手によって、何を言ってはいけないか、何を言うべきかということも問題になるのである。

近所の隣人同士A、Bが道で出会って：

A：お出かけですか？

B：ええ、ちょっとそこまで。

例えば上のような日本では（少なくともある世代では）何気ない会話も実はある文化ではきわめてあり得なさそうな会話であるかもしれないのである。つまり、ある社会・文化ではAのような質問はいわばプライバシーの侵害として不適切なものかもしれないのである。つまり、ある社会・文化において適切とされるようなある種の規範があり、文法のレベルでは適格であってもそのような規範に合致していなければ不適格な言語行為とみなされることになるのである。

そして外国語の学習者にとってさらにやっかいなことに特に会話には文字にはなかなか表しにくい相互行為的な面があるということである。例えば第三章でとりあげるようなことばのくりかえしや相手の話をさえぎったりすることがどういう働きをしているかはほとんどの話者の無意識下にあることなので、外国語の学習者には習得はおろか理解すらも困難なものだろう。教室でそのようなことを取り上げることもまれであろうし、理解はともかく習得するには実際のやり取りのなかでのみ可能なものかもしれない。

このようにざっと見てもある言語を習得しているということには、文法を理解していたり単語を知っているということ以上に実に様々な要素が加わっていることが容易に想像できるであろう。コミュニケーションを行うためには、「文法能力」だけではなく、状況や対人関係などに応じて適切な言語行動を行うことができるような「コミュニケーション能力」が必要なのである。そしてそこには抽象的な文法体系としては説明しきれない「文化」的な要素も多く含まれていることもまた想像できるのではないだろうか。

本書では会話という二者以上の中で営まれるやりとりに見られる、そういう文法以上のことがらに焦点をあてながら、さらに様々な文化においてそのやりとりが異なったふうに営まれている事例をとりあげて、会話のしくみと会話の「文化」性を見てみたいと思う。我々が普段何気なく営んでいる会話、そしてなかなか習得が難しい外国語における会話がどのようなしくみになっており、またそれがいかに文化的な所産であるかをみていきたい。

また特に第四章では異なった文化的背景、異なった会話の文化的なスタイルをもったもの同士のコミュニケーションを特にとりあげる。ノンネイティブスピーカー（非母語話者）としてコミュニケーションを行う場合のいくつかの問題を取り上げることになるだろう。「文化」を共有しているもの同士ではあらわにならないことがらも異文化間のコミュニケーションにおいてはしばしば誤解やミスコミュニケーションとして強く意識される。そのようなことがらはまさに会話の文化的な部分といえるであろう。

本書で取り上げる事例は主に言語学、社会言語学などの研究論文や研究書からひいている。一般にはあまりお目にかかることのない専門的な研究の事例の中から基本的概念として重要度の高いものや一般的にも興味深いと思われる事例を筆者の判断で集めた。事例は我々にとって馴染み深い日本語や英語（あるいは日本や英語圏の国々）だけではなくさまざまな言語文化からの事例からなっている。そのような事例は例えば英語を学ぼうとする日本人には直接関係がないように思われるが、会話の「文化」的な部分を知ることによって我々の母語や学習言語の「文化性」をも認識する手助けになるであろう。